2017.3.15
No.200

編集・発行人　樋口みな子

E-mail
minginga@agate.plala.or.jp
URL http://www13.plala.or.jp/minginga/
郵便振替「銀河通信」
02740－7－56535
（郵送6号分1,000円）

環境と平和を伝えて200号駅、通過！

2.5 今帰仁城跡の寒緋桜（沖縄）

１９８８年７月に創刊した「銀河通信」がようやく２００号に達しました。

当初は市民運動で出合った友人２０人に郵送したのが始まりでした。Ｂ４両面に手書きで近況を伝える簡素な紙面から出発しました。

１９９０年１月に家族で沖縄の戦跡を訪ねました。４人にひとりが犠牲になった沖縄戦。凄惨な集団自決の舞台となったチビチリガマに恐る恐る入りました。暗いガマの中には、当時の食器や日常品が散乱したままありました。人骨まであり、思わず叫びそうになりました。多数の戦艦が到着した残波岬にも行きました。基地の７０パーセントも沖縄に集中していることも知りました。沖縄の明るい観光地のイメージが一変するほどの驚きでした。そんなルポに写真も入れて発行したのが１９号でした。

何かお手本があるわけでもなく、自己流の通信が「人に読んでもらえるだろうか？」と応募した全国機関紙コンクールで、思いがけなく優秀賞を受賞しました。「環境保護や平和を伝える通信」でありたいと思っていましたが、この賞で方向性が決定しました。

最初は両面コピー印刷でした。読者の数が増えていくと、印刷機が必要になりました。今なら、公共機関で安く綺麗な印刷ができますが、当時は仕事と家事で手いっぱいでした。ネットでＡ３まで印刷可能な印刷機を買い、自宅で印刷し製本。三つ折りの封入作業までを、ひとりで行っていました。むしろ印刷してからの作業が大変だった記憶があります。

自宅印刷は安いと思いましたが、実際はトナー代が高くて長くは続きませんでした。今は出来上がるまでに時間がかかりますが、インターネット印刷に切り替えて今日に至っています。

働いていた頃は、経費がかさんでもなんとか発行ができましたが、１０１号からは年間6号分の印刷、送料代として１０００円を頂くことにしました。有料にすることで、責任感も生まれました。

脱原発や平和問題、人権問題に取り組む市民運動を伝えると同時に、本や映画の紹介にも大きな紙面を割くようになりました。郵送読者が増え続け２５０人になった時、webなら無料で読め、今までのバックナンバーが読めることから2013年からwebと紙印刷を併用して発行しています。今はwebで読む読者が圧倒的です。

何度も財政難になりました。「きっと面白くないからだ」と思え、何を書いていいかわからなくなったこともありました。そんな時に金子みすゞの詩に出会いました。「土」にこんな一節があります。「ぶたれぬ土は　ふまれぬ土は　いらない土か。いえいえそれは名のない草のおやどをするよ」。あなたはあなた。そのままでいいのよ、と言ってくれているようで、前に進む勇気をもらえたのでした。何度か財政難を訴え、読者からカンパが寄せられ危機から救われました。

読者から「インターネットの時代だからこその手作りミニコミ紙です。読書感想、映画鑑賞、各種イベントや人の取材などご苦労がにじみ出ています。最初、こんな人もいるんだと新鮮な驚きをいまも忘れません」とお便りを頂いた日を思い出します。

「銀河通信」はこれからも市民の小さな声を届ける通信でありたいと思います。

晴れた日も雨の日もあった200号までの旅路

■２００１年に全日本民医連新聞から「新年号のインタビュー記事を書いて欲しい」という依頼がきました。当時、職場新聞「月刊おかだま」を編集していたことや、職場のさまざまな活動を投稿していて民医連新聞の編集部の目に留まったようです。憲法24条の草案を書いたベアテ・シロタ・ゴードンさんにお話を聞くため上京しました。インタビューするためにベアテさんの著書「1945年のクリスマス」を読んで、緊張して臨んだ日を思い出します。その感動を朝日声欄に投稿。「ミニコミ通し平和の尊さを」として２００１年１月１日に掲載されました。（１０７号）

■１９９０年の新年号全国機関紙コンクールで手書き部門で優秀賞を受賞し、当時毎日新聞の論説委員の増田れい子さんが「沖縄戦の傷跡の深さを歩いて書いたルポは良かった」と講評。その縁で「北海道のリゾート開発」と題するコラムを書いたり、朝日新聞にも３回連載のコラムを書きました。（１９号と２０号）■１９９９年１１月に１００号になりました。これを機に「個人通信」に切り替えました。朝日新聞の「声」に投稿した「環境と平和へ　銀河通信１００号」として掲載されました。

■１９９７年、夕張岳やアポイ岳、礼文島、大千軒岳などで高山植物の大量盗掘問題が起きました。１９９８年、道内の市民団体や山岳団体など５０団体で北海道高山植物盗掘防止ネットワークを結成しました。私は発足の時から事務局を担ってきました。その後２００５年から２０１０年まで事務局長をしました。各団体のつなぎ役の仕事で、みなさんに助けられて、役目を全うできました。２００２年、大量盗掘があった礼文島でのキャンペーン活動の様子です。（１１６号）山岳会の自然保護委員長も４年間引き受けました。■山のトイレ問題も深刻でした。私も「山は美しいままで楽しもう」と、毎年啓発活動に参加しています。（１１１号）ここ数年は他の市民運動に忙しく、参加できないのが残念です。

みな子似顔絵（マット和子さん）

■２００３年は知里幸恵生誕１００年でした。登別や旭川で記念フォーラムが開かれ、国内外から５００人が参加して、アイヌ民族の口承文芸を初めて書き取り「アイヌ神謡集」を残して１９歳で亡くなった、知里幸恵の業績を語り合いました。（１１９号と１２３号）

■２００２年９月に広島に行きました。街のアーケード街に校門をかたちどった資料館がありました。袋町小学校平和資料館です。校舎の壁に被爆者の消息を知らせる伝言があり、胸が締め付けられました。当時は３.11福島の原発事故など予想もつきませんでしたが、広島の子どもたちは、今も平和の大切さを学んでいるのに感銘を受けました。（１１８号）■２００２年６月、有事法制に反対する呼びかけ人の一人である、札幌医大名誉教授の黒川一郎さんに戦時中のお話を聞きまし。「北大医学生が100人も戦死。戦争の道は許せない」と静かに訴え、心に残りました。（１１６号

■２００４年４月、アイヌ文化伝承への寄与で、吉川英治文化賞受賞の中本ムツ子さんを訪ねました。アイヌに目覚めたのは５０歳の時だったと語り、古老たちから、アイヌ文化や言葉を学びました。アイヌ語教室も開き、大らかで温かいムツ子さんの人柄に惹かれ、函館など各地から集まり学んでいました。私もファンの一人で、いつかアイヌ語を学びたいと思いながら、かないませんでした。（１２７号）

■２００３年当時、剣淵に住んでいた加藤多一さんを訪ねてお話を聞きました。権利を守るのは大人の責任ですときっぱり話されたこと。憲法へのあきらめは屈従への道と言われたことを今も思い出します。（１２４号）■２００７年、深川の殿平義彦さんを訪ねました。朝鮮人強制連行で犠牲になった人たちの遺骨を発掘して、韓国に返還する活動を４０年も続けています。私も独身のころに、何度か参加したことがありますが、今は東アジアの平和の架け橋になっているという話に感動しました。新年号を飾った記事で、着物姿が懐かしい。（１３１号）

■山は好きですが、登山家にはなれなかった私。2005年、日高113座を登った記録「日高辿路」を出版した登別市の神原照子さんのお話を聞きました。看護師として働きながら地図を広げては、ガイドブックにはないコースを選んで日高に挑戦してきました。私の尊敬する登山家です。（１３３号）■３.11後から、泊原発を廃炉にと奮闘して志半ばで亡くなった泉かおりさんは、以前は国連の職員でした。２００６年、アフリカでエイズで苦しむ女性たちの支援活動をしていたお話を札幌の自宅で聞きました。情熱的に語り行動する姿が今も目に焼き付いています。（１４１号）

■２００８年、４月中旬から３週間、日本山岳会のヒマラヤ環境調査に参加しました。素晴らしいエベレストを仰ぐことができ感激しました。（１５０号）■２０１４年７月に仲間とアウシュヴィッツとプラハを訪ねました。ナチスドイツがユダヤ人など、社会から排除しようと多くの人の命を奪った過去の歴史に向き合うことの大切さを心に刻みました。（１８４号）■２０１５年、全国各地で「戦争法」反対の声が高まりました。力をくれたのは自分のことばで訴えるＳＥＡＬＤｓでした。（１９４号）

沖縄と札幌をつなぐ2200キロの距離を縮めた植村さんの講演活動

植村さん沖縄講演会同行記

植村隆さんの沖縄講演ツアーは、メーンの沖縄講演会（２月４日）のほかその前後に沖縄大学での講義（２日）、辺野古での座り込み集会参加（３日）、書店でのトークイベント（同）、お寺での懇話会（５日）などがあり、盛りだくさんの内容となりました。講義や座り込みの様子は琉球新報や沖縄タイムスに大きく報じられました。

早くも球春到来の沖縄、厳寒の雪まつりの札幌。その距離は直線で２２００キロもありますが植村さんの講演は、沖縄の心と札幌の訴えをひとつにつないでくれたような気がします。

今回のツアーには「支える会」事務局から七尾さんと私がスタッフとして同行しました。以下はその同行記です。

■2月2日（木）沖縄大で講義

那覇にある私立の沖縄大学（右写真）で学生向けに講義をしました。午後１時からと４時半からの２回、計２４０人の学生が熱心に聴き入っていました。講義は「キャリア開発論」がテーマでした。植村さんは記者を志した学生時代のことも詳しく語りました。当時、東大助手だった宇井純さんが東大構内で開催していた公害原論の自主講座に通った早大生の植村さんは、東大に夜間部があったらいいのに、と考えたそうです。２１年間東大助手だった宇井さんを、その後、沖縄大で教授として迎えたことにとても感動したと話していました。

大学の構内にはカエンカズラ（上写真）とサンダンカが咲いていました。教室には暖房がないので少し寒いような気がしましたが、この季節に咲き誇る南国の花を見て、はるばる沖縄に来たことを実感しました。

■2月3日（金）辺野古で座り込み集会に参加

地元の方に協力していただき、辺野古にある米軍キャンプシュワブのゲート前での座り込み集会に参加しました。３０人ぐらいの人たちが集まっていました。悲惨な沖縄戦を体験した島袋文子さん(文子おばぁと慕われています)も参加していました。植村さんは「沖縄ヘイトや慰安婦を否定する勢力には絶対に負けない。みなさんと連帯して闘う」とスピーチしました。（下写真）驚いたのは、何人もの方が植村さんの事を知っていたことです。地元２紙に掲載された記事を読んでいてくれたのでした。

「勝つ方法はあきらめないこと」と書かれた看板がありました。辺野古、高江の闘いも、植村さんの闘いも、あきらめない！

辺野古から那覇に戻ってジュンク堂書店でのトークイベントに参加しました。５５人の参加で用意した椅子は満席となり、立って聴く人もいました。会場には高里鈴代さん（右写真）がかけつけてくれました。

高里さんは「基地・軍隊を許さない行動する女たちの会」の共同代表です。その高里さんがご夫婦で東京の早稲田奉仕園にいた頃、学生だった植村さんもお世話になっていたそうです。高里さんら沖縄の女性たちの調査で沖縄に日本軍の慰安所が１４０ヶ所もあったことが明らかにされています。

植村さんは「人権記者」として歩んで来た道とバッシングの日々を振り返り、「不当なバッシングは辛かったが、この試練は出会いという恵みもあった」と締めくくりました。

誰ひとり、途中退席せず、熱心に耳を傾けていたのが印象的でした。ジュンク堂が用意した「真実」は３０冊（完売！）、「週刊金曜日」抜き刷りも３０冊売れ、サイン会にも長い列ができました。

■2月4日（土）沖縄講演会

沖縄講演会は午後２時から沖縄大学の１０１号教室で開かれ１００人が参加しました。植村さんは自身のこれまでの闘いの経過を語り、「『中国の赤い星』を書いた米国のジャーナリスト、エドガー・スノーの自伝『目覚めへの旅』のように私もまた、目覚めへの旅をしているのだと思う」と結びました。９０分の講演の後、参加者から、植村さんを勇気づける発言が続きました。「とても説得力があった。沖縄、韓国・朝鮮、中国に対する差別を許さないことが重要だ。この沖

縄の地から闘い続けます」「植村さんは歴史修正主義者のターゲットにされ家族も巻き込まれどんなにつらかったでしょう。でも負けない！その姿勢からエネルギーをもらいました。ウチナンチューも虐げられても、負けないで頑張ります」　（この項の写真は杉山正隆さん撮影）

■2月5日（日）ミニ講演会と佐喜眞美術館

糸満市にある長谷寺の住職、岡田弘隆さんのはからいにより、お寺の本堂でミニ講演会（懇話会）を開くことができました。参加者は地元の１０人ほど。そのひとり、平良亀之助さんは「小禄九条の会」の代表世話人で、元琉球新報の記者でした。講演の後の懇談で、平良さんは「今のメディアの萎縮はひどい。跳ね返す気概を持ってほしい」と語っていました。

話が前後しますが、那覇から長谷寺に向かう途中では、丸木位里さん、丸木俊さんの作品「沖縄戦の図」を観るために宜野湾市にある佐喜眞美術館に立ち寄りました。館内の写真撮影は禁止ですが、佐喜眞道夫館長の許可を得て写すことができ案内もしていただきました。

「激しい地上戦で傷ついた後も、巨大な米軍基地が居すわったこの地に、静かにもの思う場をつくりたいと考え、美術館を作った」とブックレットに記されています。美術館設立の許可が降りるまでに８年かかったとのことです。戦争への怒りや悲しみ、いろんな思いがたくさんの展示作品から伝わってきました。屋上からは隣接する米軍普天間基地が一望に見渡せます。沖縄と日本のきびしい現実が目の前に迫り、身が引きしまる思いでした。

沖縄に来たら「一度は訪ねたい」と思っていた美術館。佐喜眞さんが「アートで平和をつくりたい」という思いが館内の隅々にこめられていました。心を静める緑豊かな庭が素敵です。

岡田住職を紹介してくださり、佐喜眞美術館や泡瀬干潟、今帰仁城跡まで案内してくださったのは水野隆夫さんです。利尻・礼文やサロベツ、知床などで国立公園レンジャーをされていた方で、私の通信の長い読者です。「沖縄に来たら、是非泡瀬干潟のサンゴ礁の海を見て欲しい」と言われていました。急な連絡にも関わらず、駆け足でしたが沖縄の自然も楽しむことができました。

外岡秀俊さん講演

メディアの変質を「同時代現象」ととらえる視点

２月１０日、植村裁判後に報告会と外岡秀俊さんの講演がありました。講演会要旨です。外岡さんは朝日新聞社ニューヨーク特派員や、東京本社編集局長を務め、退職後もジャーナリストとして活躍しています。

（以下、支える会ブログから）

外岡さんの講演は日米首脳会談のタイミング（日本時間11日未明）と重なった。外岡さんは第２次安倍政権の下で勢いを増した歴史修正主義が朝日・植村バッシング、メディアの変質（批判力の衰退）へとつながっている日本の状況を、「英国のＥＵ離脱」「トランプ旋風」という「世界を驚かせた二つの出来事との同時代現象」ととらえる視点を提示した。

トランプ政権の今後については「グローバル化がもたらした格差で生じた不満を、格差によって生じた権力によって封殺する専制化への傾向を強める」と予測した。既存メディアは既得権益者を擁護する勢力とみなされ、影響力をどんどん失っていく、その現象は日本とも共通する、と分析した。そして最後に、植村さんの著書『真実』の読み方として、①不寛容の時代へのなだれ込み②人権侵害との闘い③日韓相互理解への共感という「三つの軸」を挙げ、植村裁判を支える時代的な意味を強調した。

この後、東京訴訟支援チームの佐藤和雄さん（朝日新聞ＯＢ）が、東京訴訟の現状を報告した。東京訴訟はこれまで7回の口頭弁論を終えている。今後の方向性として、植村さんが平穏な生活を営む権利を侵害されたという損害について、『週刊文春』と攻撃者たちとの「客観的な共同不法行為」として裁判所に認めさせたい、と語った。また、弁護団の齋藤耕弁護士が、国会で論議が進む「共謀罪」について、「市民の自由を奪う法律だ。なんとしても阻止したい。法案が提出されてからでは遅い。その前に阻止しなければ」と訴えた。（text by T.Yamada）

植村裁判を支える会ブログもご覧ください。

http://sasaerukai.blogspot.jp/

２月、沖縄に咲いていた色鮮やかなサンダンカ

本 Books

ルポ　難民追跡
バルカンルートを行く

坂口裕彦著　岩波新書
840円＋税

2015年11月。難民取材のためギリシャ・レスボス島を訪れた著者はドイツへ向かうアフガニスタン人一家に同行することを決めます。

アフガン人のアリー家は治安の安定しない母国アフガニスタンを逃れてイランに移住しますが、教育や医療サービスを受けることはできるが、就くことのできる職業は重労働などに限られていました。車や土地を所有することもできないし、居住区から無許可で出ることもできない。アフガンに帰ることもままならず、イランでの生活も苦しいアリー家は、一路ドイツを目指すことを決意します。ドイツであれば、難民たちを暖かく迎え入れてくれるだろうという希望を抱いて。

難民たちがドイツを目指すルートはバルカンルートと呼ばれています。トルコからギリシャに渡り、バルカン半島を北上するルートです。ギリシャからはマケドニア、セルビア、クロアチア、オーストリアを経由してドイツに向かうことになります。

本書はアリー家が実際にバルカンルートを歩んで、ドイツに至るまでの道のりを同行取材した記録です。

難民の話はニュースなどでもよく話題になっていますが、果たしてドイツにたどり着けるのかと難民たちの生身の旅程が伝わってきて、ハラハラドキドキしながら読み終えました。

本書の４、５章の題名が「排除のハンガリー」と「贖罪のドイツ」となっています。この難問に向けて、今の日本政府が世界一遅れた先進国だということだけは確かです。難民申請しても受け入れはごくわずかです。

当時チュービンゲンに身を寄せた難民は約１２００人で、その９割はシリア、イラク、アフガンの人々という。アリー家は街の中心部からタクシーで十分程の閑静な住宅街の古い二階建て住宅に住んでいました。ここで家族は、難民申請が認められる日を待って、ドイツ語教室にバスで通いながら暮らしています。生活費はドイツから出ています。しかし国を脱出できる人は、親族に経済的援助が可能な人に限られているようです。アリー家はまだ恵まれているのかもしれません。しかし一方で、ドイツであっても、難民は受け入れたくないと考える人々も少なくありません。

この本を読んで、難民問題は、受入国だけが負担するのは限界があると思いました。どの国も、平等に受け入れる体制作りが必要ではないでしょうか？

キャスターという仕事

国谷裕子著　岩波新書
840円＋税

「クローズアップ現代」で丁寧に取材して、２３年間もキャスターを務めた国谷裕子さん。この本は、言葉の力を信じて、キャスターという仕事とは何かを模索してきた日々を語った記録です。

１９９３年に始まり２０１６年まで、３７８４回を数えた「クロ現」において「伝える」という仕事に、いかに誠意と情熱を込めてきたかを回想として語り「世の中の不寛容度が増している」と指摘しています。刺激の強い情報や大きな声でその他の情報や意見がかき消されがちな昨今、想像力、常に全体を俯瞰する力、ものごとの後ろに隠れている事実を、洞察する力が、今こそ求められています。

最初のコメント「前説」に３時間も時間をけて言葉を練ったと書いています。国谷さんの魂の言葉だったことを知りました。

単純明快に伝える方が視聴者には嬉しいけど簡単にまとめられた言葉だけでいいのか？と国谷さんは警鐘を鳴らします。

１９９７年、ペルー日本大使公邸人質事件で人質救出後にフジモリ大統領が来日したときのこと。手柄話を聞いたあとで、キャスターは同大統領の暗部である内政面での強権的手法に臆せず切り込みました。すると放送後「日本の恩人に失礼だ」との抗議が、どっと来たと言います。それでも聞くべきことは聞く姿勢は変わりませんでした。いつもキリリとして、誰に対しても臆することなく、出演者に率直に語りかける姿は憧れでした。

是非、国谷さんに続くキャスターが現れて欲しいです。

北海道から安倍＜強権＞政治にＮＯと言う

徳永エリ　紙智子　福島みずほ
寿郎社　700円＋税

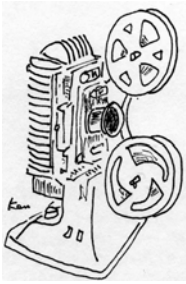
〈批判にキレる、詭弁を弄するアメリカ大統領にそっくりな総理をこれ以上暴走させないために〉

本書は、民進党、共産党、社民党の現職国会議員の三氏を講師として、２０１６年９月から１１月まで札幌で開かれた講座の内容を一冊にまとめたものです。安倍政権による〈戦争法〉〈共謀罪〉などの強行に断固反対し共闘する女性議員たちの明解で説得力のある〈ことば〉を収録しています。

徳永エリさんは、「街頭での勉強会をやりたい。中高校生とつながりをつくっていきたい」　紙智子さんは、「市民の声が国会議員を動かす。地域で署名を集めて議員に届けて欲しい。有権者が何を問題にしているのかを

議員に知ってもらう事が大事」と語っています。
　福島みずほさんは「暮らしの中から憲法をもう一度見つめ直してほしい。」「『安保関連法に反対するママの会』が『だれの子どももころさせない』と南スーダンの駆けつけ警護に反対していますが、憲法問題は身近な生活につながっているということを、これからも強く訴えていきたい」と語っています。
　小さなブックレットですが、私たちが具体的に何をしたらいのかを教えてくれます。

スノーデン　オリバー・ストーン監督



　米国家安全保障局（NSA）の職員だった青年エドワード・スノーデンが行った、米政府による国際的な監視プログラムの存在の内部告発。世界中を震撼させたこの事件を、社会派監督オリバー・ストーンが、映画化しました。
　当然、アメリカを告発するのですから映画化は困難を極めました。アメリカメジャーからは出資を全部断られます。ドイツとフランスの出資で作られたそうです。
　２０１３年６月、イギリスのガーディアン誌が報じたスクープにより、アメリカ政府が秘密裏に構築した国際的監視プログラムの存在が発覚。ガーディアン誌にその情報を提供したのはアメリカ国家安全保障局NSAの職員である２９歳の青年エドワード・スノーデンでした。国を愛する平凡な若者だったスノーデンが、なぜ輝かしいキャリアと幸せな人生を捨ててまで、世界最強の情報機関に反旗を翻すまでに至ったのか。テロリストのみならず全世界の個人情報が監視されている事実に危機感を募らせていく過程を、パートナーとしてスノーデンを支え続けたリンゼイ・ミルズとの関係も交えながら描きます。
　彼が恋人リンゼイ・ミルズと出会うエピソードが印象に残ります。スノーデンはインドア派の保守。リンゼイは快活でリベラルと性格や思想は正反対でしたが、共に日本のサブカルが好きで、不思議とウマが合ったのです。スノーデンの人生の重要な9年間、ずっと一緒にいて彼の決断にも関わっていました。リンゼイの普通の人権感覚がスノーデンを変えたと私は思います。
　ロシアに亡命したスノーデンが、ネット中継で公の場に姿を現すラスト・シーンに心揺さぶられました。なぜスノーデンが人生のすべてを捨てて危険な告発を決意したのかを語るシーン。真摯でまっすぐな気高さに満ちた言葉に胸を打たれました。

未来を花束にして　サラ・ガブロン監督

　１００年前のイギリスで女性参政権を求めて立ち上がった女性たちを描いた作品で、実話に基づいています。
　原題の「サフラジェット」とは闘争的女性参政権活動家の意味。１９１２年のロンドン。モードは７歳から洗濯工場で働き、１２歳で正式雇用。同じ職場の男と結婚し、息子誕生。男の週給１９シリング、女１３シリング。男の労働時間は３割短い。それが当たり前で、モードは親子３人の暮らしを幸せに思っていました。
　戦闘的運動には抵抗していた彼女が、次第に巻き込まれていく過程が描かれます。やがてモードは友人に代わって、下院の公聴会で証言をすることになりました。工場での待遇や劣悪な環境を証言し、「今とは異なる生き方があるのでは？」という疑問を持つようになります。モードも連帯を示す花を帽子につけ、社会からの反発を受けながら、社会を変える闘いに参加していきます。しかし法律改正の願いは届きません。デモに参加した女性は警察の拷問を受け、政治家にも裏切られます。モードは夫から追い出され、息子まで奪われます。モードは市民には迷惑をかけたくないと思いながら、自身の生き方に目覚め、子どもたちの、希望あふれる未来のために声を上げ続けます。モードを演じたキャリー・マリガンの熱演が素晴らしかったです。息子を奪われた悲しみに涙は見せず、自分の生き方を息子に見せる姿に共感しました。
　さまざまな階級を超えて連帯した女性たちの願いが社会を変えていったことに、感動しました。

人生フルーツ
伏原健之監督

　建築家の津端修一さん９０歳と妻英子さん８７歳は、愛知県春日井市の高蔵寺ニュータウンの隣で５０年暮らしています。二人が暮らす家は師であるアントニン・レーモンドの自邸を模した３０畳一間、平屋建てで玄関がありません。自宅の敷地内に畑と雑木林を作りました。畑で栽培した野菜や果物は１００種類以上だというのも驚きでした。
　ひでこさんはコンビニは使いません。畑で収穫した野菜を使って、毎日、手料理を丁寧に作ります。私たちが失った本当の豊かさとは何かを問いかけます。こんなにさわやかに信念を持った生き方を貫けたふたりに深い敬意を覚えました。お互いを尊重しかけがえのない存在であることが、しみじみと伝わってきました。いい夫婦だな～と、思わずわが身を振り返りました。

植村隆さんと語る集いに寄せて

樋口　みな子

メディアの萎縮歴然
真実伝え言論の自由守る

植村隆さんが26年前に書いた「慰安婦」問題の記事が発端になって、激しいバッシングにさらされた。植村さんが現役の朝日新聞記者だったら、ここまでたたかれただろうか？　これは言論の自由に対する卑劣な攻撃である。

匿名で発するネットでの「反日」「売国奴」「国益を損なった」「国賊だ、出て行け」などの罵詈雑言に、社会はこんなにも変わってしまったのか？と強い衝撃を受けた。

植村さんが非常勤講師をされていた北星学園大学（札幌市）に3千通を超える脅迫や嫌がらせメールが届いた。札幌では、植村さんを応援しようという世論が一気に高まった。

2014年のバッシングは異常だったと植村さんは振り返り、さまざまなバッシングに怯まなかったのは「私には事実という武器がある」からと語っている。

植村隆さんは名誉毀損訴訟の原告として東京と札幌で昨年、計9回の口頭弁論に出廷した。3月からは韓国にも拠点を構え、カトリック大学（ソウル）の客員教授として日韓両国の理解と交流の推進に力を尽くした。国内では、全国各地から招かれて集会やシンポジウムでバッシング攻撃の理不尽さと歴史修正主義勢力の誤りを、丁寧に語り続けた。講演会は大小合わせて40回を超え、日韓の大学での講義も11回！　不屈の精神と頑健な肉体の持ち主だからこそ、乗り切れたのだと思う。

札幌地裁に入廷する植村隆さん（中央）と弁護団＝2016年6月10日

社会全体が異論を許さない時代の空気を感じる。さまざまな意見を言える場が、最近は狭まっているように感じる。植村バッシングは象徴的な出来事ではないだろうか？　新聞の役割は権力の監視である。「植村さんは捏造などしていない」と新聞は大論陣を張って、植村さんを擁護してほしかった。やっかいな問題には触れたくないと、政治権力を恐れた萎縮が進んでいるのが歴然である。

昨年9月、植村さんの九州講演会ツアーにボランティアとして参加した。講演会では、福岡、熊本、水俣、北九州市などを巡り、水俣病やハンセン病問題で差別・偏見と闘ってきた歴史、川内原発に反対する闘いなど、粘り強い闘いの歴史をひしと感じることができた。たくさんの方が植村さんの話に耳を傾け、感想を記した。その一部を紹介する。

▽言論の自由、報道の自由がなくなっていくとどうなるのか、まざまざと感じることができました。自分の立っているところで、しっかり闘っていかねばと心新たにしました。▽報道のごまかしや矛盾を改めて実感しました。真実を隠そうとする姿を見極めていきたいと思います。▽歴史修正主義者と闘うには学ぶことの大切さを思いました。元慰安婦の人権を守ることは私たちの人権を守ることだ。▽在日朝鮮人としてこれからも、言論の暴力に信念を持って立ち向かっていこうと思います。植村さんから闘う勇気をもらいました。▽戦争の足音が聞こえるようなお話だった。何としても押し返さなくてはと思った。

さまざまな市民運動で闘ってきた人たちに出会えて、厳しい闘いであっても真実を訴え続ければ、支援の輪が広がることを実感した。私も伝えることで植村さんを応援し続けたいと思う。

植村さんの講演を何度も聞いているが、植村さんはどんどんパワーアップしている。ぜひ沖縄講演会に足を運んでください。お目にかかれるのを楽しみにしています。

（植村裁判を支える市民の会事務局、個人通信「銀河通信」主宰）

2月4日（土）午後2～5時、沖縄大学3号館101教室で、植村隆氏を招いて言論表現の自由、ジャーナリズム、人権、労働などについて考える集いが開催される。参加自由。資料代500円。問い合わせは☎090（1947）6327（米倉）。3日（金）午後6時からはジュンク堂書店那覇店でトークイベントを行う。問い合わせは☎098（860）7175。

購読料とカンパありがとうございます（敬称略）1.21～3.9

北村巌（札幌市）中谷剛（ポーランド）齊木登茂子（中野区）　高橋儁（札幌市）豊村みどり（札幌市）宮本紀子（中野区）久野真紀子（様似町）川崎剛（江戸川区）森隆子（赤井川村）中川悦子（札幌市）齋藤耕（札幌市）小池修生（札幌市）坂井恒俊・京子（旭川市）但馬桂子（江別市）中佐藤真理（札幌市）西田進（横浜市）中村京子（札幌市）奥村育栄（札幌市）

合計50.000円は印刷と送料に使わせていただきます。ありがとうございます。